

「わび・さびの精神」を 省エネルギーに生かそう



フランソワーズ・モレシャン
(ファッション・アドバイザー)

フランス人は、物を買うのに、ことのほか慎重です。そして、一度買ったなら、とことん大切に使用します。ですから、電気などのエネ

わたくしが生まれ育ったフランスでは、電気もガスも水道も、普通の日用品や衣服と同じように「買う」という感覚なんですね。

日本人が、長い歴史の中で、はぐくんできた、いわゆる生活の知恵の数々に、わたしは日本のみなさんの「エレガンスな心」を見ることがあります。

物を大切に、つまり省資源・省エネルギーは、心のエレガンス（優雅）の問題だと思えます。心のエレガンス——日本の伝統に即していえば、「わび・さびの精神」にも通じる「優雅な作法（心）」とでもいうのでしょうか。

ルギーも同じで、買った以上はムダなく大切に使う習慣が、小さいころから身につけています。物を粗末に扱うということは、人間として恥かしいこと——という意識が強いんですね。

わたしの目から見て、いまだに「理解」できないのは、喫茶店などの自動ドア。電気のムダづかいの象徴のような気がするのです。エネルギーを「湯水」のように使える時代は終わりました。いまこそ、伝統的な生活の知恵を見直すときではないでしょうか。

日常生活が便利になるに越したことはありませんが、貴重なエネルギーが伴う場合は、そのバランスをよく考える必要があると思えます。

ところが残念なことに、現在の日本人の生活に、伝統的な生活の知恵が、あまり生かされていないように思えるのですが、いかがでしょうか。

暮らしの源

8月1日(水の日)～7日

水の週間

節水型社会をめざして

「水の使用量は、文明の尺度」といわれた時代がありました。生活水準が向上し、産業が盛んになるにつれて、水の使用量もぐんぐん増えることから、このようにいわれたのです。

ところが今では、この「文明の尺度」も通用しなくなってきました。というのも、もはや水は「いくらでもあって、いつでも好きなだけ使えるもの」ではなくなくなってきたからです。お金などの浪費をたとえて「湯

水のように使う」といいます。このたとえば、水が無尽蔵にあった時代にはできたのでしようが、いまでは「死語」同然になりつつあるといつてよいでしょう。

昔から、豊富な水に恵まれてきた、わたしたち日光市民は、水をムダなく上手に使う節水の知恵や工夫を、や、もすると怠ってきた

のではないのでしょうか。

水不足に悩む大都会の生活は他人事と考えず、生活の中に、節約する心を育てたいものです。八月一日は「水の日」。この

日から一週間は「水の週間」です。これを機に、水の使い方にもうひとつ工夫をしてみたいものです。

節水の工夫の一つに、蛇口のひねり方があります。蛇口から出る水の量は、一分間に、ちよつとひねって(三分の一)約五リットル、いっぱいひねると約二十五リットルにもなります。その差二十リットル……手近かなところで、節水の工夫を考えてみましょう。

省エネルギーのポイント

みんなの協力が必要

電力のもととなる石油の確保がむずかしい現在、私たちはできる範囲で、電力の節減に協力したいものです。そこで、省エネルギーのポイント、電気の上手な使い方をいくつかあげてみました。

照明 △部屋の照明は必要以上に明るくしない △部屋を空けるときは手まめに消す △仕事をしなくても消灯する △誘蛾灯などの外灯は点灯しない △ネオンなどの装飾灯も極力ひかえる

テレビ・ラジオ △見ない・聞かないときはこまめに消す(瞬間受像式テレビは差し込みを抜く) 扇風機・換気扇 △必要のないにまわしておかない

アイロン・ドライヤー △使わないときはコンセントをはずす 冷蔵庫 △背面は壁から一〇〜一五センチ離す △ドアの開閉は回数を少なく手早くする

クーラー △室内温度が摂氏二十八度以下のときは使用しない 現在市役所では、昼休みと留守になった事務室の照明は、電力節減のため消灯しています。みなさんの職場やご家庭でも、できることから実行し、省エネルギーに協力しましょう。